

キルヒナーの略語辞典に想う

小野 秀誠

キルヒナーは、ドイツの法律家の中でもっとも著名な者である。法学では略号が用いられることが多く、その解明のためには解説本が必要となる。キルヒナーの略語辞典は、法律文献の検索に不可欠のものである(Kirchner - Abkürzungsverzeichnis der Rechtssprache)。分野を問わないことから、お世話になる機会も多い。略語辞典は、法学の中で広く参照される文献であり、かつキルヒマンの講演(「法学の学問としての無価値性」1848年)と同様に広く知られ、法学上もっとも重要な著作の1つとなっている。

辞典には、1万1000以上の法令、法律用語、法律雑誌の略記や存続年等が収録されている。1957年に初版、2018年に9版を重ねた。4版(1992年)まではキルヒナーが、その後はブッツの手になる。キルヒナーは、BGH(連邦裁判所)の図書館長、ブッツは、連邦行政裁判所の図書館長である。

この略語集の創刊者のキルヒナー(Hildebert Kirchner, 1920.11.8-2012.5.28)は、1920年に、ニーダーザクセンのヒルデスハイム(ハノーバーの南約30km)で生まれた。法学を学び、第1次、第2次国家試験に合格し、1948年に、ニーダーザクセンで検察官となった。その経歴は法律家であるが、ゲッチンゲンで図書館試補となり、1952年に、カールスルーエのBGHの図書館に転じた。1956年から85年まで、そこで図書館長をした。1985年に定年。その間に、図書館の蔵書は、26万冊を超えた。この図書館は、1990年のドイツ再統一後に、旧東ドイツ最高裁の蔵書をも統合し、法律に特化した図書館としては最大の蔵書を有する。おおよそ5世紀にわたる法学文献の宝庫となっている。在職中、議会図書館や諸官庁との図書館共同体(APBB)の創設メンバーとなり、1964年から75年には、その座長でもあった。ドイツ図書館協会でも、法律図書との関係で、種々の委員会やプロジェクトを遂行した。2012年に、カールスルーエで亡くなった。65歳の祝賀論文集がある(Festschrift für Hildebert Kirchner zum 65.G., hrsg. v.Dietz/Pannier), 1985.

キルヒナーは、法律文献雑誌(Karlsruher Juristische Bibliographie, KJB)の創刊にも関与している。この雑誌は、法学のすべての分野にわたって、著作、論文、記事を月刊で網羅する。雑誌は、1965年から継続しており、近時は、紙以外のメディアの文献も対象とする。

長く館長をするのは、裁判所の図書館だけの特徴というわけではない。ドイツの大学の図書館長は専門職であり、学長が1年任期で名目的なとは異なる。その在任期間は、しばしば20年以上にもなる。日本では、学部や大学院の教授が兼任することが通常であろう。組織上の相違や、長短はそれぞれにあるだろうが、専門職の重要性の一端を物語るものである。文書官で著名なのは、リーベリッヒ(Heinz Hans Heinrich Lieberich, 1905.1.29-1999.10.24)である。彼も、法律の第2次国家試験に合格後、バイエルンで文書官となった。1959年に、バイエルンの国立文書館の総理事官となった(1970年に退職)。彼の方は、ミッターのドイツ法制史概説(ミッター=リーベリッヒ・世良晃志郎訳・1971年)およびミッター・ドイツ私法概説(世良晃志郎・広中俊雄訳、1976年)の改定で著名である。バイエルン学術アカデミーの会長もしている。